「日本の息吹」400号に寄せて

元空将　織田邦男

日本は今、戦後最悪の安全保障環境下にある。北朝鮮は国連制裁にもかかわらず、「核の小型化・弾頭化を既に実現」し、「我が国の安全に対する重大かつ差し迫った脅威」（白書）である。

中国は覇権的、強権的行動を強め、ウイグル、チベット、モンゴル、香港に対する人権弾圧は目を覆うばかりで、台湾への武力行使も広言する。南シナ海では仲裁裁判所裁定を無視し、岩礁を埋め立てて軍事化を図り、ほぼ全域を手中にした。そして尖閣諸島の実効支配は中国に落ちつつある。

お隣の韓国は慰安婦財団解散、旭日旗排除、徴用工判決、レーダー照射、天皇侮辱発言、GSOMIA破棄騒動、主権免除を覆す慰安婦判決等、反日無罪のオンパレード。頼みの綱の米国は、社会の分断が深刻化し、世界の指導者の地位が揺らぎつつある。

こういう危機的情勢下にあって、日本の一番の問題点は、日本人が危機を認識できないばかりか、認識できない自分自身に気が付かないことだ。

米国の某財団が指摘する。「日本は憲法で全ての力の行使を否定したため、政府も国民も力の行使が重要な要因となる現実の国際情勢を正しく理解できなくなった」

真実に向き合わず、無知ゆえの安心の上に成り立っている虚妄の平和にいつまでも安住はできない。民主主義を守るためには力の行使が否定できないこと、これを先ず国民に伝えなければならない。この役割を担う「日本の息吹」の存在は今後も重い。